

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1271100792		
法人名	株式会社 新くらし工房		
事業所名	グループホームおりびおヴィレッジ (壱号館)		
所在地	千葉県木更津市港南台1-31-5		
自己評価作成日	平成22年2月1日	評価結果市町村受理日	平成22年4月14日

事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://hokoku.chibakenshakyo.com/kaigorep/jlnit.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人VAICコミュニティケア研究所
所在地	千葉県千葉市中央区千葉港4-4 千葉県労働者福祉センター5階
訪問調査日	平成22年2月19日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<p>・館内は入居者それぞれにとって居心地のよい空間になるように、調度品・装飾等を工夫している</p> <p>・重度化してきているが、その方の「できること・やりたいと思っている事」に視点をおいたケアを目指し、外へ出る機会を多く持てるように心がけている</p> <p>・ホーム全体として食事やティータイムを特に大切にしている。スタッフは研修や勉強会に参加し、それを日常生活や行事などに活かしている</p>

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>新興住宅街にある南欧風の瀟洒な造りのホームである。室内は掃除が行き届き清潔で、今年の1月にはスプリンクラーも設置された。ケアカンファレンスには必ず家族の参加があり、家族の意見を介護計画に反映させると同時に、ケア記録を毎月家族に送付している。とくにサービスでは食事に力を入れており、味付けや彩りに工夫するほか食器も季節によって変えるなど、職員と共に楽しく美味しく食べる支援をしている。職員のケアに対する意欲も高く、入居者に寄り添い出来るだけ見守りに徹し、出来ることを待つことで自立を促している。入居者本位を実現させようと管理者、職員が協働している。</p>
--

・サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) 項目 1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 該当するものに 印	項目	取り組みの成果 該当するものに 印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価(番号館) および外部評価結果(全ユニット)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
理念に基づく運営					
1	(1)	理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	玄関に掲げられている理念を基に、スタッフは日常の中で入居者一人一人の心に寄り添うような時間を過ごすことを心掛けている。	理念は玄関に掲示している。管理者は、入居者が重度化してもケアの基本は変わらないことなどを職員に話し、全員で理念に沿ったケアを心がけている。	
2	(2)	事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会に加入しており、散歩がてら入居者とスタッフが回覧板を一緒に届けたり、入居者参加の避難訓練に地域の方を招いたりして、地域との交流を持っている。	ホーム便りを自治会の回覧板に挿んだり、近隣の家のポストに入れ、地域住民にホームの案内をしている。また、散歩時には近隣住民と挨拶を交わしたり区の敬老会にも参加している。	
3		事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	以前は近隣の小学生へグループホームの説明と見学を行ったが、現在は継続していない。今後も認知症の人の理解や支援のあり方を地域の人々に活かせる方法を探したい。		
4	(3)	運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	定期的に開かれている運営推進会議で日々の活動状況・入居者の状況等を報告するとともに、質問や意見を挙げていただき、ケアの中に活かしている。	年4回開催し、高齢者福祉課、地域包括支援センター、区長、家族代表のほか、時には入居者が参加することもある。内容は各参加者からの連絡事項や情報交換などである。	運営推進会議の意義について参加者の理解を更に深め、自己評価、外部評価の内容や課題を話しあう等、より内容のある会議にしていくことが望まれる。
5	(4)	市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	介護相談員が毎月来訪し、入居者からサービス状況の聞き取りを行う他、定期的に行われている運営推進会議でホームでのサービスや行事予定を伝えたり、市の活動や予定を聞く等の情報交換をしている。	毎月介護相談員が来訪し、希望者と面談している。相談員からは内容のフィードバックがある。また、市の職員とは運営推進会議等で話し合う機会がある。	
6	(5)	身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	全スタッフが身体拘束を正しく理解し、拘束のない支援をしている。昼夜問わず侵入警報が鳴り、不審者から入居者を守る為、止むを得ず玄関に施錠しているが、内側からは開けやすい。	身体拘束をしないケアについて全職員は理解している。しかし、不審者が何度か立ち入ったことがあるほか、女性職員も多く、やむを得ず玄関の施錠をしている。	職員が鍵をかけることの弊害について理解し、入居者自身も閉塞感を感じないケアを目指して工夫していくことが期待される。
7		虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	ミーティングやスタッフ間での話し合いを通して虐待防止への理解を深めている。		

グループホームおりびおヴィレッジ 自己評価(番号館)・評価結果(全ユニット)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	以前、地域福祉権利擁護事業の支援を、受けていた入居者がおり、現在も成年後見制度を利用している入居者がいる。その都度学んでいる。		
9		契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居契約前には重要事項説明書を提示説明し、理解と納得を得た上で契約を行っている。		
10	(6)	運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	定期的カンファレンスや面会の際に話しやすい雰囲気を作り、積極的に不満や苦情を言って頂くよう努めている。	定期カンファレンスや面会時に家族の意見を聞いている。ケアに対する要望が多いが、職員の離職でサービスが手薄になったときには家族から意見が出て、通院、美容の支援は家族が協力することもあった。	
11	(7)	運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	意見や提案がある場合は、その都度話し合い反映させている。	ミーティング以外にも、何かあればその都度意見や要望を聞いている。職員の提案を取り入れ勤務時間帯の変更を行ったこともある。	
12		就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	労働時間は、スタッフの意見を取り入れ、それぞれの希望する時間を考慮しながら、体制を整えている。職場環境の整備等、働きやすい職場となるよう努めている。		
13		職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	スタッフ自ら探して来た興味や関心のある研修を受けさせている。また、県や各種団体等の外部の研修の機会も設けているが、全スタッフのスキルに応じた研修計画を立てるには至っていない。		
14		同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	外部研修会等で同業者と交流する機会はあるが、ネットワーク作り相互訪問までには至っていない。		

グループホームおりびおヴィレッジ 自己評価(番号館)・評価結果(全ユニット)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	面談時には、本人や家族の困っていること、不安なことを確認しながら、ホームの雰囲気を感じてもらえるようにしている。個々の状況に応じて、入居者が安心してサービスを利用できる関係作りに努めている。		
16		初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前までに最低でも二回以上の面談を行っている。不安や要望を聴きながら、十分な話し合いを重ね、家族のサポートができるよう、関係作りに努めている。		
17		初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居時の本人と家族の状態や必要としていることを聞き、状況に応じてその時できる支援や助言、サービスの提案を行っている。		
18		本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	男性スタッフや男性入居者が家事をしていると、すぐに手を貸し、家事を行う入居者も多い。一緒に家事を行いながら、共同生活者としての関係を築いている。		
19		本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会やカンファレンス時、本人の希望や様子を伝え、十分話し合いながら、共に本人を支えていく為に双方の役割やできることの確認をしている。家族が発言しやすい雰囲気作りにも努めている。		
20	(8)	馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族との外出、外泊を大切にしている。面会時にはゆっくり過ごせるよう、お茶を出す以外は出入りを遠慮している。また手紙や宅配物等が届いた際は本人に手渡し、喜びを共感している。	家族の協力も得て墓参りや外食、カラオケに行っている入居者もいる。お盆や正月には以前の職場の同僚が訪ねて来ることもある。また、遠方の同窓会に参加した入居者は、その後友人と電話や手紙で交流をしている。	
21		利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	スタッフがパイプ役となり、入居者同士のつながりや関わり合いを支援している。お互い助け合い、車椅子や介助の必要な方を気遣う場面も見られる。		

グループホームおりびおヴィレッジ 自己評価(番号館)・評価結果(全ユニット)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	他施設に移動や入院の為退居となった後も本人の様子を伺いに来訪することもあり、本人や家族と話す機会を設けている。退居してからの礼状も多く届いている。		
その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ひとりひとりの生活歴を尊重し、興味のある物を提供できるよう努めている。本人との会話や表情、家族の情報などから意向の把握に努めている。意思表示がはっきりしない場合は思いを汲み取りの事が難しい。	一人ひとり状態は異なるので、職員は絶えず気にかけている。新しい入居者については、入居前の情報をもとに好きな話題、ゲームの話などをし、会話の中から希望、意向の把握に努めている。汲み取った内容は申し送りノートなどで全職員に伝えている。	
24		これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	数回行う入居前の面談にて本人や家族から、その人の「歴史」をできるだけ聞き取るようにしている。ケアカンファレンス時や本人との会話からも生活歴や暮らし方を把握している。		
25		暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人一人の一日の心身状態を日誌に記入し、スタッフが目を通し、勤務交代時には申し送りで常に個人状態を把握している。		
26	(10)	チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	定期的に家族参加のケアカンファレンスを実施し、入居者の日々の暮らしを記入した日誌、医師や家族の意見等を踏まえ、介護計画書を作成している。	毎月、介護個人記録を家族に送付しており、家族は詳細な介護内容を確認することができる。年2回の見直しカンファレンスには全家族の参加が得られており、家族の意見がスタッフ、医師などの意見とともに介護計画に反映されている。	
27		個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の生活状況など個人記録をつけ、工夫をした方が良いことはスタッフ間で話し合い、実践や介護計画の見直しに活かしている。		
28		一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人や家族の状況に合わせて、その時最適なサービスや支援ができるよう努めている。		

グループホームおりびおヴィレッジ 自己評価(番号館)・評価結果(全ユニット)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	一人一人の出来る事に声を掛け、たとえ時間が掛かって温かく見守り、本人の力を引き出せるよう工夫している。安全で豊かな暮らしを楽しむ事ができるよう地域資源の把握に努めたい。		
30	(11)	かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居時に、協力医療機関への受診に関して説明を行っている。本人と家族の納得を得て、入居後は受診している。	協力医は月2回、事業所に往診に来ており、入居者の状態を把握している。休日、夜間でも携帯電話を通じて医師、看護師と緊急の連絡をつけることが出来、指示を受けたり、場合によっては往診を受けることができる。	
31		看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	スタッフは日々の関わりの中で「いつもと違う」気づきを、協力医療機関のNSやDr.へ伝えている。必要に応じて医療処置へ対応する場合もある。		
32		入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には速やかに情報提供を行っている。又、入院後にはかかりつけ医を通じて、状況を把握できるようこまめに連絡をとるようにしている。		
33	(12)	重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	面会時やケアカンファレンス時等、家族へ今後の状態への対応を話し合っている。終末期ケア実施時は、かかりつけ医をはじめ、スタッフ皆で段階に応じて支援を行った。	原則として終末期ケアは行っていない。このことは入居時に家族へ説明している。カンファレンス時等で本人の状態に応じた対応を家族、医師らと相談している。又、入院可能な病院やバックアップの施設とも連携をとっている。	入居者は年々自立度が低下し、今後の介護に家族も職員も不安を感じている。終末期ケアは行わない方針であるが、その場合もホーム及び職員で出来ること、出来ないことを再確認し、医師、家族とも繰り返し協議、合意を重ねていくことが望まれる。
34		急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	市町村で開催されている救命救急講習を受けているが、緊急時に活かせるような実践力までは備わっていない。		
35	(13)	災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回(4月・10月)に消防士立ち会いにて総合避難訓練を実施している。訓練時には近隣住民も参加し、地域との協力体制について話し合っている。	消防訓練では避難口の確認、消火器の使い方、夜間想定訓練などを近隣の住民も参加して行った。又、職員とは携帯を使った一斉メールで緊急(夜間)連絡も可能としている。	

グループホームおりびおヴィレッジ 自己評価(番号館)・評価結果(全ユニット)

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
36	(14)	一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	居室はプライベートな空間と考え、スタッフは不必要に入室しない。常に敬語でなければならぬのではなく、その場に合った言葉遣いや態度を心がけている。	言葉づかいやトイレ、風呂などの各場面でふさわしくない事例、言動があった時、その場で注意し合っている。特に先輩職員は現場での指導、注意を重視しており、実行している。		
37		利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	様々な場面で本人の意思を尋ねたり、選択できるような働きかけを行っている。思いを言葉に表せない方については、表情や動作から読み取れるよう心がけている。			
38		日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	それぞれのペースを尊重した生活時間を大切にしている。食事・入浴・就床起床時には声掛けする意外は、自由にしており、夜中まで好きなテレビ番組を楽しむ方もいる。			
39		身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	衣替え時期には家族から新しい服が届いたり、通販カタログを利用して好みの品物を購入することもある。化粧やマニキュアは、気分転換や外出時にスタッフと共に楽しむ。			
40	(15)	食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	スタッフも共に食事を楽しんでいる。食べ方に混乱が目立った方に対しては、スタッフが向き合い、さりげなく見本を示し、サポートしている。準備、片付けをスタッフと一緒にやっている。	ホームでは食に力を入れている。地元産の素材を中心とした栄養バランスを考えた食事を提供している。ランチョンマットや食器にも気を遣い、彩りの良い料理を引き立てていた。		
41		栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	おおよそのカロリー計算をし、献立を立てている。週1回の体重測定や、排泄状況から食事を見直すようにしている。医師の指示により、高カロリードリンクや水分補助ゼリーを飲む方あり。			
42		口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケア(歯みがき、うがい、入れ歯洗浄)をすすめる声かけと介助を実施。就寝前にはスタッフが入れ歯を預かり、洗浄と管理を行っている。			

グループホームおりびおヴィレッジ 自己評価(番号館)・評価結果(全ユニット)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	定時誘導やさりげなく声かけをしている。トイレの場所を忘れてしまう方には、声をかけ案内している。自室にポータブルトイレを設置している方もいる。	排泄チェック表を活用して、トイレ誘導のタイミングを掴むようにしている。夜昼のオムツの使い分け、野菜を多めにする食事の工夫、水分補給など一人ひとりに配慮、工夫をしている。	
44		便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日の食事に野菜を多く取り入れる、水分を勧める、散歩等を実施している。それでも排便がない方は、医師に相談し、指示を仰いでいる。		
45	(17)	入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	一人ひとりの希望に合わせた入浴を行っている。入浴では、1対1で見守り、介助。二人抱え介助等、それぞれが安全に寛いで入浴できるよう支援している。入浴剤を使用する等リラックスできるよう心がけている。	1ユニットに2つの浴槽と広い更衣室があり、入居者の状態に合わせた介助を受けることが出来、1日おきに入浴をしている。希望により毎日の入浴も可能である。入浴剤を入れたりして、楽しくゆっくりと入浴できるよう支援している。	
46		安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	食事、掃除、入浴、散歩、家事、アクティビティー等の基本リズムを崩さないよう心がけている。夜間眠れない方は、飲み物を勧めたり、スタッフと会話しながらリラックスできるよう支援している。		
47		服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の処方内容や用法等を一覧にしている。指示通り服薬できるように支援している。また、服薬後、薬包を回収し、服薬介助スタッフ以外のスタッフが更にダブルチェックし、飲み忘れのないよう工夫している。		
48		役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家事の手伝い(食器拭き、掃除、洗濯物たたみ等)を自分の仕事だと張り切って行っている方がおり、常に感謝の言葉をかけている。意欲を引き出したり、気分転換となるよう声かけを工夫している。		
49	(18)	日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天気や気分に応じて、散歩や外出をしている。季節ごとに楽しめる外出先を全スタッフが提案し、計画、実行している(外食、ドライブ、花見、花火見物等)。	週2~3回、少数単位で出かけている。元気な人は車椅子の人を押すなどして協力し合っている。ホームの庭が広く、庭内の散策、野菜づくり、日光浴を楽しむこともある。季節ごとにイベントとして花見、ドライブとランチ、花火見物などを行っている。	

グループホームおりびおヴィレッジ 自己評価(壱号館)・評価結果(全ユニット)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	数名だが、お金を所持しており、力量を把握し、外出時の買い物では見守りや手伝いをしている。		
51		電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話や手紙のやり取りが混乱を招くことも多く、積極的な支援はしていないが、届いた手紙(年賀状やカード)等はスタッフが説明して、本人に渡している。		
52	(19)	居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	空間を利用し、庭の花や鉢植や装飾(タペストリー)で季節感を、廊下には写真を展示している。室内にはBGMを流し、ゆったりとした雰囲気となるよう心がけている。照度や室温、乾燥等に注意し、過ごしやすい環境となるよう配慮している。	全館バリアフリーで車椅子の利用が可能である。温度や光の調節も適切で、各階には和室があり、落ち着ける雰囲気である。調査で訪れた時には雛人形が飾られて、季節を感じさせた。	
53		共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	居間、食堂、和室と入居者自らが好みの場所で過ごせるよう声かけを行っている。テレビ周辺には多人数でも寛げるソファが設置されており、気の合った入居者同士で過ごしている。		
54	(20)	居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族と相談しながら、入居以前に使用していた家具や衣服、又、アルバムや絵画を設置している。仏壇を設置している入居者もあり、安らいで過ごせるよう声かけしている。	広めの収納があるので、居室は広く感じられる。時には職員から提案して模様替えを行う等、それぞれの好みに合わせて居心地よく過ごせるよう工夫している。	
55		一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	共用部、居室部とも全館バリアフリーで廊下、階段には手すりが取り付けられている。階段の段差が低くなっており、エレベーター、階段と入居者が選んで使用出来るようになっている。		